研究発表主旨
2025 年 2 月 24 日「推しのプレゼン」大会

大和路の芭蕉句碑を巡る
磯村洋一

はじめに
松尾芭蕉は生涯の後半の 10 年は江戸を離れ旅に出、6 回ほど「大和行脚」を行いました。『野ざらし紀行』や『笈の小文（おいのこぶみ)』の紀行文の中で大和を詠んだ 35 の句碑を紹介しながら、句に込められた芭蕉の思いに触れていきます。

1.大和に建てられている芭蕉の句碑の紹介

まず、大和に建てられている芭蕉の句碑を紹介します。参考文献やネットなどで調べたところ３５の碑があります。もしこの資料にない碑がありましたら後で教えてください。このリストは碑が建てられた順に並べています。
碑に刻まれた句の数について、
6 番と 29 番，10 番と 35 番は 1 つの句が 2 箇所に建てられています。逆に 22 番と 32 番は 2 つの句が 1 つの碑に刻まれています。従って、碑の数も句の数も 35 となります。
ただ、すべてが奈良で詠まれた句というわけではなく、5 番.8 番.14 番と.32 番～34 番は江戸その他で詠まれたもの、さらに 20 番はそもそも芭蕉の句ではないとの記載もあります。
松尾芭蕉の生涯について説明した後、この句碑に刻まれた句の中から特に皆様に紹介したい句を「推しの 9 句」としてプレゼンさせていただきます。

大和に建てられている芭蕉の 35 碑　建碑順　「芭蕉大和路　大安隆」等参照

1	安永年間（1772～82？）	春の夜やこもり人床し堂の隅	初瀬・崇蓮寺境内（長谷寺）	1688	笈の小文	
2	寛政5年（1793）	菊の香や奈良にはふるき佛達	奈良・称念寺境内	1694	笈日記	
3	享和3年（1803）	さくらがりきとくや日々に五里六里	五条・桜井寺境内	1688	笈の小文	
4	文化6年（1809）	綿弓や琵琶に慰む竹の奥	当麻・竹内・綿弓塚	1684	野ざらし紀行	
5	文化7年（1810）	けふばかり人も年よれ初時雨	郡山・良幻寺境内	1692	韻塞	△詠場所：江戸
6	文化11年（1814）	くたびれて宿かる比や藤の花	天理・三昧田・権現辻	1688	笈の小文	
7	文化11年（1814）	花ざかり山は日比の朝ぼらけ	吉野山・下千本	1688	芭蕉庵小文庫	
8	文化13年（1816）	梅が香にのっと日の出る山路かな	榛原・宗祐寺境内	1694	笈日記	△詠場所：江戸
9	文政4年（1821）	若葉して御目の雫拭はばや	奈良・唐招提寺境内	1688	笈の小文	
10	文政年間（1818～30？）	奈良七重七堂伽藍八重ざくら	奈良・若草山麓	年次不明	泊般集	
11	弘化3年（1846）	露とくとく試に浮世すすがばや	吉野山・苔清水	1684	野ざらし紀行	
12	江戸末期？	芳野にてさくら見せうぞ檜木笠	吉野山・下千本	1688	笈の小文	
13	不詳	世にさかる花にも念仏まうしけり	大淀・比曽・世尊寺境内	貞享年間	芭蕉句集	
14	明治初年？	春もややけしきととのふ月と梅	月ヶ瀬・一目万本台	1693	薦獅子集	△詠場所：江戸
15	明治22年（1889）	春の夜はさくらに明てし舞けり	桜井・来迎寺境内	年次不明	翁草	
16	明治25年（1892）	猶見たし花に明行神の顔	御所・一言主神社境内	1688	笈の小文	
17	大正2年（1913）	水取や籠りの僧の沓の音	奈良・東大寺二月堂下	1685	野ざらし紀行	
18	昭和9年（1934）	僧朝顔幾死にかへる法の松	当麻・当麻寺中之坊前庭	1684	野ざらし紀行	
19	昭和12年（1937）	うぐいすを魂に眠るか嬌柳	天理・在原神社境内	～1683	みなしぐり	
20	昭和30年（1955）	飯貝や雨に泊りて田螺きく	吉野・飯貝・本善寺境内	？	？	作：×芭蕉
21	昭和42年（1967）	雲雀より空にやすらふ峠かな	吉野・細峠頂上	1688	笈の小文	
22	昭和45年（1970）	瀧門の花や上戸の土産にせん	吉野・竜門滝前	1688	笈の小文	1つの碑に2句
22	昭和45年（1970）	酒のみに語らんかかる瀧の花	吉野・竜門滝前	1688	笈の小文	1つの碑に2句
23	昭和45年（1970）	ほろほろと山吹くちるかたきの音	川上・大滝茶屋横	1688	笈の小文	
24	昭和45年（1970）	碓打ちて我にきかせよや坊が妻	吉野山・東南院前庭	1684	野ざらし紀行	
25	昭和45年（1970）	御廟年経て忍は何をしのぶ草	吉野山・如意輪寺境内	1684	野ざらし紀行	
26	昭和46年（1971）	木の葉散桜は軽し檜木笠	吉野山・金峰神社境内	1684	真蹟短冊	
27	昭和46年（1971）	春雨のこしたにつたふ清水哉	吉野山・苔清水	1688	笈の小文	
28	昭和47年（1972）	はなのかげうたひに似たるたび寝哉	吉野・平尾バス停前	1688	笈の小文	
29	昭和54年（1979）	草臥て宿かる比や藤の花	橿原・八木公民館前	1688	笈の小文	
30	平成2年（1990）	うち山やとさましらずの花ざかり	天理・永久寺跡・本堂池畔	1673	大和巡礼	
31	平成5年（1993）	ぴいと啼く尻声悲し夜の鹿	奈良・春日大社境内	1694	笈日記	
32	平成5年（1993）	蛤のふたみに別行秋ぞ	下市・中央公園	1689	奥の細道	△1つの碑に2句
32	平成5年（1993）	みのむしのねを聞にこよ草の庵	下市・中央公園	1687	深川芭蕉庵	△1つの碑に2句
33	平成7年（1995）	夏草や兵共が夢の跡	下市・中央公園	1689	奥の細道	△
34	平成7年（1995）	馬ぼくぼく我を絵に見舞夏野かな	下市・中央公園	1683	三冊子	△
35	平成11年（1999）	奈良七重七堂伽藍八重ざくら	奈良・なら１００年会館	年次不明	泊般集	

2.松尾芭蕉の生涯

松尾芭蕉　略年表

江戸時代前期の俳人　1644-1694　伊賀上野出身

983 句の作品

武家奉公をしつつ俳諧になじむ。江戸で宗匠(俳諧の師匠)となり、晩年の 10 年間（1684～1694）は旅と庵住を繰り返しつつ、俳諧の革新を成し遂げる。

＜略年譜（抜粋）＞

1684（貞享元）8 月①「野ざらし紀行」　竹ノ内村・吉野他　伊賀上野で年越

1685（貞享２）2 月②　東大寺二月堂お水取り参堂・興福寺薪能見学

1687（貞享４）8 月「鹿島紀行」　　10 月「笈の小文」

1688（貞享５）3 月③三輪・八木・吉野・当麻・葛城・奈良　8 月「更科紀行」

1689（元禄２）3 月「おくの細道」

11 月④奈良　春日若宮御祭見学

1691 （元禄４）2 月⑤興福寺薪能見学

1694（元禄７） 9 月⑥9/8～9/9　奈良市内

10 月　10/12 大坂で病没

青字はいわゆる「芭蕉の５大紀行」で、「野ざらし紀行」と「笈の小文」の旅で奈良に多くの句を残しています。赤丸は奈良を訪れた年に番号を付けています。計 6 回訪れています。詳細は、このあと推しの句のお話の中で説明します。

3.推しの９句

９句にはそれぞれタイトルをつけて説明します。句の頭の番号は句碑リストの番号です

１）　芭蕉　こころのふるさと　竹ノ内村

（４）綿弓や琵琶に慰む竹のおく

句碑の場所：竹ノ内・綿弓塚

年次：1684(貞享元)年９月

底本：野ざらし紀行

意訳：ひっそりとした竹林の奥、綿弓の音が琵琶のように響いて私の心を慰めてくれる

綿弓広場　庭の全景

野ざらし紀行の旅は、「野垂れ死んで白骨になることも覚悟し大きな不安を抱えた厳しい修行の旅」でしたが、竹ノ内村で出会った人々と心が通じ合い、心の安らぎを得たのです。年表のとおり、竹ノ内村には４回訪問しています。これは大和の訪問先で一番多いと言われています。これを見ても、竹ノ内村は芭蕉の「心のふるさとだった」といえると思います。

松尾芭蕉　略年表　　竹ノ内村　４回訪問

＜略年譜（抜粋）＞

- 1684（貞享元）8月①「野ざらし紀行」
  9月 ⑴**竹ノ内村**→吉野→⑵**竹ノ内村**　伊賀上野で年越
- 1685（貞享２）2月②⑶**竹ノ内村**→東大寺2月堂お水取り参堂→
  興福寺薪能見学
- 1688（貞享５）3月③「笈の小文」
  三輪・八木・吉野　当麻・葛城・⑷**竹ノ内村**
- 1689（元禄２）11月④奈良　春日若宮御祭見学
- 1691（元禄４）2月⑤興福寺薪能見学
- 1694（元禄7）　9月⑥9/8～9/9　重陽の節句を奈良で
  10月　10/12大坂で病没

2）芭蕉の憧憬（あこがれ）　　西行

（11）露とくとく試に浮世すすがばや

句碑の場所：吉野山・苔清水

年次：　1684(貞享元)年

底本：野ざらし紀行

芭蕉の句は、「とくとくと落つる岩間の苔清水　くみほすほどもなき住居哉」という、西行の句を受けて作ったものです。芭蕉はこんな句も作っています。日頃から、いかに西行を意識しているかがわかると思います。西行は、芭蕉の「憧れの人だった」ことがわかると思います。

・西行の　草鞋（わらじ）もかかれ　松の露（松の絵を見て）

・芋洗ふ女　西行ならば歌よまむ

3）芭蕉の哀傷（あいしょう　悲しく心を痛める）南朝回帰　後醍醐天皇

（25）御廟年経て忍は何をしのぶ草

句碑の場所：吉野山・如意輪寺境内

年次：　1684(貞享元)年

底本：野ざらし紀行

意訳：歳月を経た後醍醐帝の御廟(お墓）にはびこるしのぶ草は、何を偲んで いるのだろうか

4）芭蕉のやさしさ　鑑真

（9）若葉して御目の雫拭はばや

句碑の場所：奈良・唐招提寺境内

年次：　1688(貞享 5)年　初夏

底本：笈の小文

（笈とは、書籍などを背負って歩く道具　竹で編んだ箱）

意訳：若葉によって目もとの雫をぬぐって差し上げたい

5）芭蕉も奈良派

芭蕉も奈良派

＜略年譜（抜粋）＞

- 1684（貞享元）8月①「野ざらし紀行」
  竹ノ内村・吉野他　伊賀上野で年越
- 1685（貞享２）2月②「野ざらし紀行」
  東大寺二月堂お水取り参堂・興福寺薪能見学
- 1687（貞享４）8月「鹿島紀行」　10月～「笈の小文」
- 1688（貞享５）3月③「笈の小文」
  三輪・八木・吉野・当麻・葛城・大仏殿再建起工式
- 1689（元禄２）3月「おくの細道」
  11月④奈良　春日若宮御祭見学
- 1691（元禄４）2月⑤興福寺薪能見学
- 1694（元禄７）9月⑥9/8～9/9　重陽の節句を奈良で
  10月　10/12大坂で病没

ご覧のように、東大寺のお水取り、興福寺の薪能の見学、東大寺大仏殿の再建起工式、春日若宮のおん祭、２度目の興福寺の薪能見学。と、いにしえの行事に憧れがあったことに間違いはありません。正真正銘、芭蕉は奈良派です。

（17）水取や籠りの僧の沓の音

句碑の場所：奈良・東大寺二月堂下

年次：1685（貞享５）年　２月

底本：野ざらし紀行

意訳：お水取りの凍りつくような気配の中、僧達の沓の音が響きわたる

句碑

◆芭蕉の原作：　水取や氷の僧の沓の音

面白いのは、肝心の所が原作と変わっていることです。原作は、「氷」、　お水取りを生で見ているときの寒さ冷たさがリアルに伝わってきますが、その後弟子が籠もりの方が合うと思ったのか書き直し、句碑にもこちらの「籠もり」が刻まれました。芭蕉の研究者も判断は二分しています。皆さんはどちらがお好みですか？

6）２箇所に碑がある人気の句　　part1

まるで奈良のキャッチコピー

(10)(35)奈良七重七堂伽藍八重ざくら

句碑の場所：　①奈良・若草山麓　　②なら百年会館

年次：　不明

底本：泊般集

①奈良・若草山麓の句碑　　②なら百年会館の句碑

文政年間（1818～30）

平成11年（1999年）

意訳：奈良には七代の皇都であり、七堂伽藍を備えた
　　大寺院が多く、古歌に名高い八重桜もある

この句は名詞を並べただけなのですが、数字をうまく組み入れて絶妙なリズムになっています。

7）２箇所に碑がある人気の句　　part2
推敲の妙！

（６）(29)草臥て宿かる比や藤の花
　　句碑の場所：　①天理・三昧田・権現辻
　　②橿原・八木公民館前
　　年次：　1688(貞享 5)年
　　底本：笈の小文

なぜ 2 箇所に句碑があるかというと、それぞれ、「芭蕉が当地に宿泊した」と言いたいのですが、それを裏付ける決め手がなく、研究者の意見も二分しており、現在に至っています。

天理

• 地図

碑

八木

意訳：歩き疲れて宿屋を求める夕暮れのころ、 藤の花が私をとらえる

推敲の妙！初案：ほととぎす宿かる比の藤の花

この句のポイントは、芭蕉がどこに泊まったかではなくて、推敲の妙にあります。芭蕉は「ホトトギス」を好んで句にしていましたが、さすがに藤の花とは季節にずれがあり、推敲を重ね「草臥れて」と替え、より趣のある句が完成しました。

8）芭蕉と桜

心を弾ませて花の吉野山にやってきた芭蕉、期待にそむかぬ見事な風光に感嘆して三日も滞在していながら、笈の小文に記するところでは、遂に思うような句作がなかった。

「我いはん言葉もなくて、いたづらに口をとじたる、いと口おし。」

芭蕉大和路より

しかしながら、この句は面白いので推しの句に加えました。

(3)さくらがり　きとくや日々に五里六里

句碑の場所：五条・桜井寺境内

年次：　1688(貞享 5)年

底本：笈の小文

意訳：桜を求めて毎日何里も歩くとは、我ながら奇特　なことよ

皮肉交じりに、自嘲気味に、でも少し自慢げに、ニヤッとしている　芭蕉の顔が想像できて楽しくなりました。

１里４キロなので毎日２０キロ以上歩いている。芭蕉は健脚です！

9）特別な日を特別な場所で　　重陽の節句

（2）菊の香や　奈良にはふるき　佛達

句碑の場所：奈良・称念寺境内

年次：１６９４年（元禄７）９月９日

底本：笈日記

意訳：古き、み仏達がまします奈良の都には、菊の香がただよっている。

全句集には、「重陽の節句という特別な日を特別大切な奈良の地で迎える幸せ。それをあえて説明せず、菊と奈良と仏を並べることで、古風で優雅なイメージを醸し出している。」と解説しています。

この句が詠まれた日、
１６９４年9月9日というのがポイントになります。
9月9日は、「重陽の節句」といわれ、平安時代の初めに中国から伝わったとされています。
中国では、奇数は縁起の良い「陽の日」とされ、奇数の重なる日を祝いの日と考えられました。陽の日の最大値である「9」が重なる日を「重陽」と節句の一つにしたと言われています。
旧暦の9月9日は、現在の10月中旬頃にあたり、菊の花が見頃を迎える時期です。中国では、菊は邪を払う力を持っているとされており、それが日本に語り継がれ、重陽の節句では菊の花を楽しむ行事となっています。
江戸時代に入ると、幕府が節句を楽しむことを推奨していたとも言われています。
重陽の節句は四季を彩る5節句の1つとして庶民の楽しみでした。

四季を彩る五節句

日付	漢名	和名
1月7日	人日（じんじつ）の節句	七草の節句
3月3日	上巳（じょうし）の節句	桃の節句　ひな祭り
5月5日	端午（たんご）　の節句	菖蒲の節句　こいのぼり
7月7日	七夕（しちせき）の節句	笹竹の節句　七夕（たなばた）
9月9日	重陽（ちょうよう）の節句	菊の節句

改めて年表をご覧ください。奈良に来た季節、過去5回はいずれも重陽の節句ではなかった。この年の秋、大阪から、しどうとしゅどうという2人の弟子のいさかいを仲裁してほしいとの依頼があり、大阪に行くのですが、その前にわざわざ9月8日の朝早くに伊賀上野を出発し、夜遅く奈良に到着しました。おそらくですが、すでに芭蕉の体調は結構悪かった。しかし翌月死ぬとは思っていなかった。だから、奈良で菊の花を愛でれば、邪を払い自分の体調も回復するのではないかという希望を持ってやってきたのではないかと私は思います。そして、翌日の9月9日にこの句を詠んだあと大阪に向かったのです。しかし、希望むなしく翌10月12日に病気で亡くなりました。この句は芭蕉が奈良で詠んだ最後の句となりました。

推しの９句

	句
１	綿弓や琵琶に慰む竹の奥
２	露とくとく試に浮世すすがばや
３	御廟年経て忍は何をしのぶ草
４	若葉して御目の雫拭はばや
５	水取や籠りの僧の沓の音
６	奈良七重七堂伽藍八重ざくら
７	くたびれて宿かる比や藤の花
８	さくらがりきとくや日々に五里六里
９	菊の香や奈良にはふるき佛達

以上、推しの９句をプレゼンさせていただきました。9 句はいかがだったでしょうか？句の数は、最初はベスト１０にしようと思ったのですが、重陽の節句の話を最後にしたかったので、それに関連付けて推しの句の数も９句にしました。今日は話せませんでしたが、碑に刻まれていない句も含めて推したい句がたくさんあります。別の機会があれば、お話しさせていただけるよう、これからも引き続き大和の芭蕉の句に関わっていきたいと思います。